

1978-1

No.112

表紙 牧馬図屏風 長谷川信春筆

解説は17ページ参照

題字デザイン・桑山弥三郎

カット・林美紀子

もくじ

年頭に当たって……………犬丸 直…………	4
地方文化運動の中で……………荒木精之…………	6
歌舞伎・文楽・竹本の伝承者養成…………佐藤鉄彌…………	10
カルコン・交流美術展における 美術品のケアに関する会議…………倉田文作…………	13
アジア・太平洋地域 著作隣接権セミナーに参加して…………田原昭之…………	16
文化庁ニュース 重要文化財建造物の新指定……………	18
第24回文化財防火デー……………	19
昭和52年度文化財愛護活動全国研究集会開く…………	20
文化財指導者講習会開かる……………	21
昭和52年度都道府県 文化財保護指導委員研修会の開催……………	21
地方文化活動リーダー研修会の開催……………	22
〔紹介〕 フランスの新国語施策……………前田陽一…………	23
タイの文学……………岩城雄次郎…………	25
文化財保護法教室（14） 埋蔵文化財（Ⅱ）……………	28
我が県の文化行政 未来をひらく文化の振興をめざして——山口県—— ……………河野良輔…………	31
美術館・博物館・文化施設めぐり⑧ 浮世絵のリッカー美術館……………	34
国立劇場ニュース……………	35

歌舞伎・文楽・竹本の伝承者養成



佐藤鉄彌

(国立劇場調査養成部養成課長)

*国立劇場の伝統芸能伝承者養成事業

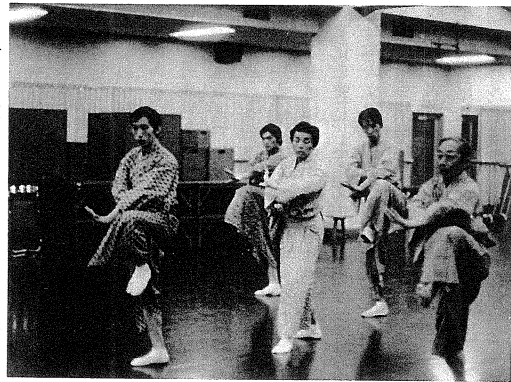
昭和四十一年十一月、国立劇場は、歌舞伎・文楽・舞踊・雅楽・声明・狂言と、多彩な記念公演で開場したが、伝統芸能の公開、調査研究とともに国立劇場の主要な業務である伝承者養成については、まず歌舞伎俳優の後継者から取組むこととし、その準備として百名をこえる学識経験者・俳優・邦楽演奏家等の意見を聴取して昭和四十二年一月次のような「伝統芸能伝承者養成計画基本構想(二案)」が作成された。応募資格は中学卒の男子とし、一般から公募する。修業年限は五年、授業は全日制、教授方針は実技重点主義で、修了生は国立劇場と専属契約を結ぶという内容である。

これに対し、一般に芸事の修業は幼少から一対一でからだで覚えるものであって画一的な教室教育は困難であるという考え方があり、また、公募しても志望者があるであろうか、たとえ素

人を養成しても、果たして門閥に厳しい排他的な歌舞伎界が受け入れるであろうかという不安もあって、養成の根本問題についてさまざまに批判があった。そこで昭和四十三年三月国立劇場に養成に関する専門委員会を設け、修業年限、募集の形式、教科内容、教育方法、修了後の措置等について二年間にわたって慎重に討議が続けられたのち、歌舞伎俳優の養成にふみ切った。

*歌舞伎俳優の研修

昭和四十五年四月、国立劇場は伝統歌舞伎保存会との共同事業として、一般から歌舞伎俳優の研修生を公募した。応募資格は中学校卒業以上の男子で原則として二十三歳以下の者。五月に選考を行い、十名の者に六月から二年間国立劇場内の教室で研修を行った。以後隔年に十名ずつ募集し、現在第四期生が研修をうけている。全日制で、一日四科目(一科目は一回一時間半)を研修し、二年間の総回数は約一八〇〇回であ



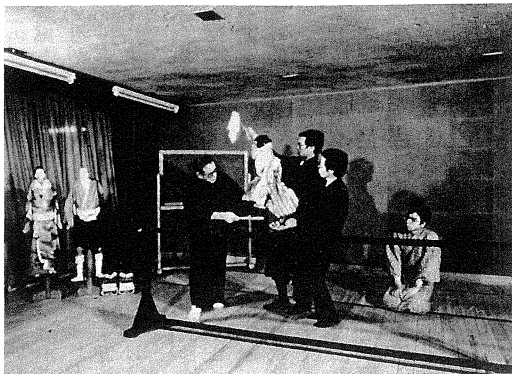
歌舞伎研修風景 講師・中村又五郎氏

*歌舞伎既成若手俳優の研修

国立劇場では一般公募の歌舞伎研修とは別に、昭和四十三年四月より若手俳優の有志を対象に日本舞踊・義太夫・長唄・鳴物等のうちから一科目か二科目を選び、各一週間位の日程で自主公演の行われる月に研修を実施している。当初の講師は各界の第一人者であった。また初年度の受講者のなかには片岡孝夫・片岡秀太郎・坂東玉三郎・沢村由次郎(田之助)等の名前が見られる。昭和四十七年以降は各期の研修修了者が逐次加わり、現在ではこの修了者を中心に日本俳優協会所属の若手俳優が参加して現職教育の場となっている。

*文楽技芸員の研修

人形浄瑠璃「文楽」の技芸員は太夫・三味線弾き・人形遣いの三業にわかれるが、近年は高齢者が多く若年層が不足して総数が年々減少している。昭和四十七年四月国立劇場は文楽協会と共同事業で歌舞伎にならって一般公募による研修を開始した。応募資格は中学校卒業以上の男子で、原則として二十三歳以下の者。募集人員は約十名。期間は二年間。全日制で一日三または四科目(一科目は一回一時間半)を研修する。場所は国立劇場の教室であるが、文楽の大阪本公演の期間中(年四回、二十日間位ずつ)は大阪に移る。科目は義太夫・三味線・人形実技・舞台実習等の実技関係が七〇パーセント、地唄・舞・箏・胡弓・発音発声・作法等の基礎科目が二〇パーセント、教養のための講義が一



文楽研修風景 講師・吉田玉男氏

い研鑽にいそむ。現在一・二・三期研修の修了者が入門している。計二十三名、平均年齢は二十六歳である。

市川笑也・尾上梅太郎・尾上緑也・中村歌彌・中村仲助・中村又志郎・坂東大助・坂東八重蔵・松本錦彌(第一期生)

片岡門彌・中村歌壽・中村鴈乃助・中村駒次・中村芝喜松・中村仲一郎・中村仲二郎・中村又一・中村又次郎(第二期生)

市川猿十郎・尾上松男・実川若之介・中村京妙・中村富四郎(第三期生)

修了者は年間十か月程舞台に出演するが、何よりも力を入れているのは彼等の意欲の結実と

もいべき稚魚の会の公演である。これは幹部俳優の指導をうけて代表的狂言に取組む勉強の機会であるが、昭和四十七年八月国立劇場青年歌舞伎祭に参加したのが第一回で、以後二回これに加わり、五十一年よりは単独の公演で既に五回を数えている。国立劇場と伝統歌舞伎保存会はこの何かと援助をし、また友の会会員約二五〇名が支援している。こうして日々修業にはげむ彼等には海外公演の好機もあった。

四十八年五月第一期修了者はアメリカの大学演劇祭に招かれてワシントンのケネディセンター劇場で公演をし、五十一年は十月十一月第三期修了者が第二期修了者が加わって主としてアメリカの各大学を対象に約十五か所で三十回の公演をした。さらに五十二年三月第二期修了者が中心でタイ・ビルマ・インドで公演をした。

歌舞伎俳優の研修も現在第四期で、五十三年三月には七名が修了する。一応事業としては軌道に乗った形ではあるが、他面多くの難問を抱えている。第一は門閥の幹部俳優への入門制度とこの事業の当初より論議的となっていた国立劇場専属との関係、および当然これに伴う芸能の伝承の問題、次に研修開始以来四期を終わろうとしているが、これを踏まえて修業年限・研修科目・修了後の研修等について再検討が必要であるとの批判。また最低賃金の保証、身分制度の確立という問題。さらに昭和五十三年には修了者の総数が三十名になるが、これを加えてもなお、歌舞伎俳優とくに下級俳優の人数が年々減少の傾向にあり、今後も引き続いて新人を養成する必要があることなどである。

○パーセントで、二年間通算で計約一八〇〇回。委嘱した講師は一流である。研修については次のような方針が立てられている。即ち、はじめの一年間は太夫・三味線・人形の各志望を分けずに共通課程とし、二年目に三業に分ける。また三業とも研修の基盤を三味線の稽古とし、なお各講師の芸風の違いを考慮して一演目は一人の教師が担当する教授方法を厳守することなどである。

研修生は歌舞伎の場合と同じく大半が文楽を知らない者であるが、二年間にわたって傍目にも厳しい教育を受け、試演会三回と発表会一回に出演してすべての課程を修了すると、直ちにそれぞれ幹部技芸員に入門して芸名を貰い、文楽協会に所属し舞台に出演する。現在、昭和四十七年度の第一期研修の修了者と四十九年度の第二期研修の修了者が入門して活躍している。計十三名、平均年齢は二六・六歳である。

竹澤弥三郎・竹本津国大夫・竹本南司大夫・竹本文字栄大夫・鶴澤浅造・野澤錦市・野澤松也・吉田玉輝（第一期生）
桐竹龜次・桐竹勘弥・竹本文字登大夫・鶴澤八介・吉田玉英（第二期生）

現在受講中の研修生は第三期生二名と第四期生七名である。昭和五十一年募集の第三期生があまりにも少数なので、本来隔年募集の方針であるが、一年繰り上げて五十二年も募集を行った。文楽の研修生募集は每期困難をきわめている。研修を開始して五年、その実態がわかり、とくに将来の生活の不安が原因となっているという意見もあって、最近技芸員の待遇が改善さ

れた。また文楽は昔から門閥も問わず、全く実力本位で舞台に活躍出来る世界であるにも拘らず、研修修了者が入門後、太夫二名、三味線二名（内一名は復帰）脱落した。これは必ずしも修了者に限らないことではあるが、厳しい修業によるものか、関係者の苦慮するところである。しかし、文楽について何よりも気がかりな事は人間国宝級の名手長老技芸員の急激な減少である。この十年の間に三業を通じて十数名を失っている。まことに文楽の危機というべく、国立文楽劇場の建設の促進もさることながら、いま伝統芸能文楽の衣鉢を継ぐ人々が健在である間に後継者を養成しなければ、文楽はおそらく異質の芸能となるであろうといわれている。

* 文楽既成若手技芸員の研修

国立劇場では文楽の若い世代の既成技芸員の技芸向上のため、昭和四十九年四月から国立劇場で文楽の公演のある月ごとに、年四回その研修を行っている。すでに各師匠のもとにある若手を集めて研修を行うことは講師との芸風の相違ということもあって実施が困難であるが、現在には国立劇場と文楽協会との共催の素浄瑠璃と人形浄瑠璃の勉強会である文楽若手発表会に直接する研修として行われている。

* 竹本連中の講習

竹本連中、竹本ともいうが、歌舞伎の義太夫語りの太夫と三味線弾きで、俳優のせりふ以外の地を演奏する。二十数名いるが、平均年齢六十五歳、近年減少の傾向にあり、数年後には歌

舞伎の半数以上を占める義太夫狂言が上演不能になると憂慮されていた。昭和五十年六月、文化庁は関係者を集めて事情を聴取したが、その直後、幸いに三人の太夫志望者を得たので、国立劇場は同年九月より松竹株式会社・義太夫協会・伝統歌舞伎保存会との共催で急遽竹本講習をはじめた。全日制で教科は義太夫本行と歌舞伎の竹本を並行させ、一日二科目（一科目は一回一時間半）、一か月に三週間程度、期間を一応二年とした。本行の講師は女義、のちに文楽の技芸員が加わり、竹本は太夫と三味線が舞台に出演の余暇をさいての協力である。講習生は現在では太夫二名、三味線一名が増加したが平均年齢は三十七歳である。当然生活の保証を必要とし、松竹は講習手当を支給している。

竹本にもいくつかの問題点がある。ゆらい竹本には師弟の関係がないので技芸の伝承が不安である。待遇については、舞台出演のない時は無給を例としているが全員何程かの生活保証があるように改善されなければならない。また、竹本連中は俳優に從属する立場にあり、文楽にくらべて社会的評価が低いことは今後考慮する必要がある。

竹本講習の開始された頃、国立劇場で、歌舞伎の立廻りを考案する立師、歌舞伎の伴奏音楽ともいふべき黒御簾音楽の選曲・新作を担当する附師、常磐津の演奏者などの後継者養成について論議された。いずれも少数の老練練達者が孤塁を守っている状況であるが、後継を志す者が見当らず、今後の課題である。

国立劇場 ニュース

■文 楽 公 演

二月十一日(二十五日)

(十九日より昼夜狂言入替)

第一部 (正午開演)

菅原伝授手習鑑
壇浦兜軍記

第二部 (五時開演)

撰州合邦辻
義士銘々伝
鍵の権三重帷子

二月の文楽も古典の名作を集めた充実番組である。まず第一部は時代物三大傑作の一つ「菅原伝授手習鑑」で、とくに桜丸に焦点をしばった半通しの形で構成されている。

つぎの「壇浦兜軍記」も「阿古屋の琴責」で有名な人気狂言の随一である。傾城姿の美しい人形が、琴、三味線、胡弓の三曲を演奏して、視覚的興味と、その曲が名曲で聴衆を魅了する。

第二部も第一部に劣らず人気狂言の

「撰州合邦辻」「合邦庵室」で始まる。

義理の伸とはいえ、我が子に思いを寄せる玉手御前の不倫の恋は、最終的には悪人を欺くための方策であったとわかるにしても、数多い浄瑠璃作品のなかで特異な設定であり、しばしばギリ



「壇浦兜軍記」(阿古屋の琴責)より

シヤ悲劇に擬して論ぜられる。

つぎは珍しく「義士銘々伝」の「弥作の鎌腹」が出る。題名からわかるとおり赤穂義士を扱った忠臣蔵外伝の一つで、最近では銘々伝として上演される唯一の作品になった。

最後は近松の三大森通物の一つ「鍵

の権三重帷子」で「浜の宮」「市之進郎」

「数寄屋」「女敵討」と通し上演する。

■雅楽公演(管絃)

団乱旋 一具 (復活初演)

二月四日

序 一帖 二帖 三帖

入波

踊踏

急声

唐楽大曲団乱旋が廃絶した時刻はよく分からないが近世以降は演奏されていまいようである。勿論明治撰定譜には断片一帖すら含まれていない。しかし、古い記録や譜に当たってみると舌越調の大曲としてのかなり確実な姿を把握することができ。

大曲には大曲としての姿が備わっている。多くの曲が断片でしか伝わらず一具の姿を失っている今日、大曲の一具揃った姿の再現は極めて意義が深い。典拠は懐中譜・新撰笙笛譜などに拠った。

編集後記

〇明けておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い致します。昭和五十三年は文化庁設立後十年目に当たる。この間に著作権法や文化財保護法の改正、モナ・リザ展の開催、高松塚古墳の発見、国立国際美術館の開館など大きな出来事も多かった。

新しい年は、過去十年間を振り返るとともに次の十年への展望を開く年として、新たな気持ちで文化行政を進める必要がある。

〇本号は新年号でもあるので、通常より四ページ増とした。大丸長官の年頭の所感や荒木精之氏の地方文化の振興についての考え方など文化行政の基本にふれる読み物を掲載している。(K)

広告の問合せ・申込み先

株式会社 きょうせい 営業課

TEL: 〇三三六八二二四(代表)

〒100 東京都千代田区霞が関三丁目2番2号

「文化庁月報」 一月号 (通巻第一二二号)

昭和53年1月25日印刷・発行

編集 文化庁

発行所 株式会社 きょうせい

本社 千代田区中央区銀座7丁目4番12号

営業所 122 東京都新宿区西五軒町52番地

電話 〇三三六八二二四(代表)

振替口座 東京 九一六一番

印刷所 ㈱行政学会印刷所

定価・一五〇円(送料二九円)

年間購読料 一、八〇〇円